

[B年] 受難節第2主日(2022年3月13日)**【旧約聖書日課】 エレミヤ書 2章1~13節**

- 1 主の言葉がわたしに臨んだ。
- 2 行って、エルサレムの人々に呼びかけ
耳を傾けさせよ。
主はこう言われる。
わたしは、あなたの若いときの真心
花嫁のときの愛
種蒔かれぬ地、荒れ野での従順を思い起こす。
- 3 イスラエルは主にさげられたもの
収穫の初穂であった。
それを食べる者はみな罰せられ
災いを被った、と主は言われる。
- 4 ヤコブの家よ
イスラエルの家のすべての部族よ
主の言葉を聞け。
- 5 主はこう言われる。
お前たちの先祖は
わたしにどんなおちどがあつたので
遠く離れて行ったのか。
彼らは空しいもの後を追ひ
空しいものとなってしまった。
- 6 彼らは尋ねもしなかった。
「主はどこにおられるのか
わたしたちをエジプトの地から上らせ
あの荒野、荒涼とした、穴だらけの地
乾ききった、暗黒の地
だれひとりそこを通らず
人の住まない地に導かれた方は」と。
- 7 わたしは、お前たちを実り豊かな地に導き
味の良い果物を食べさせた。
ところが、お前たちはわたしの土地に入ると
そこを汚し
わたしが与えた土地を忌まわしいものに変えた。
- 8 祭司たちも尋ねなかった。
「主はどこにおられるのか」と。
律法を教える人たちはわたしを理解せず
指導者たちはわたしに背き
預言者たちはバアルによって預言し
助けにならぬもの後を追った。
- 9 それゆえ、わたしはお前たちを
あらためて告発し
また、お前たちの子孫と争うと
主は言われる。
- 10 キティムの島々に渡って、尋ね
ケダルに人を送って、よく調べさせ
果たして、こんなことがあつたかどうか確かめよ。
- 11 一体、どこの国が
神々を取り替えたことがあろうか
しかも、神でないものど。
ところが、わが民はおのが栄光を

助けにならぬものと取り替えた。

- 12 天よ、驚け、このことを
大いに、震えおののけ、と主は言われる。
- 13 まことに、わが民は二つの悪を行った。
生ける水の源であるわたしを捨てて
無用の水溜めを掘った。
水をためることのできない
こわれた水溜めを。

【使徒書日課】 エフェソの信徒への手紙 6章10~20節

- 10 最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によつて強くなりなさい。11 悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。12 わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです。13 だから、邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことができるように、神の武具を身に着けなさい。14 立って、真理を帯として腰に締め、正義を胸当てとして着け、15 平和の福音を告げる準備を履物としなさい。16 なおその上に、信仰を盾として取りなさい。それによって、悪い者の放つ火の矢をことごとく消すことができます。17 また、救いを兜としてかぶり、霊の剣、すなわち神の言葉を取りなさい。18 どのような時にも、“霊”に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。19 また、わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆に示すことができるように、わたしのためにも祈ってください。20 わたしはこの福音の使者として鎖につながれていますが、それでも、語るべきことは大胆に話せるように、祈ってください。

【福音書日課】 マルコによる福音書 3章20~27節

- 20 イエスが家に帰られると、群衆がまた集まつて来て、一同は食事をする暇もないほどであった。
- 21 身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。22 エルサレムから下つて来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭の力で悪霊を追い出している」と言っていた。23 そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。24 国が内輪で争えば、その国は成り立たない。25 家が内輪で争えば、その家は成り立たない。26 同じように、サタンが内輪めめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。27 また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 2章1～13節

- 1 主の言葉が私に臨んだ。
 2 行って、エルサレムの人々の耳に呼びかけよ。
 主はこう言われる。
 私は覚えている
 あなたの若い頃の誠実を
 花嫁の時の愛を
 種の蒔かれない地、荒野野で
 あなたが私に従って来たことを。
 3 イスラエルは主に献げられた聖なるもの
 その収穫の初穂であった。
 それを口にする者はことごとく罪に定められ
 災いに見舞われる——主の仰せ。
 4 聞け、主の言葉を。
 ヤコブの家よ
 イスラエルの家の全氏族よ
 5 主はこう言われる。
 あなたがたの先祖は
 私にどのような不正を見つけて
 私から遠く離れて行ってしまったのか。
 彼らは空しいものの後を追
 空しいものになり果ててしまった。
 6 彼らは尋ねもしなかった。
 「主はどこにおられるのか
 私たちをエジプトの地から導き上り
 荒れ野、荒れた穴だらけの地
 乾ききった死の陰の地
 誰一人通る者もなく
 人の住まない地に導かれた方は」と。
 7 私は、あなたがたを実り豊かな地に導き入れて
 その良い実を食べさせた。
 ところが、あなたがたは私の地に入ると
 そこを汚し
 私の所有の地を忌むべきものとした。
 8 祭司たちも尋ねなかった。
 「主はどこにおられるのか」と。
 律法をつかさどる者たちも私を知らず
 牧者たちは私に背き
 預言者たちはバアルによって預言し
 役に立たないものに従った。
 9 それゆえ、私はあなたがたと改めて争う。
 また、あなたがたの子々孫々に至るまで争う
 ——主の仰せ。
 10 キティムの島々に渡って、よく見よ。
 ケダルに人を送って、よく調べ
 果たして、こんなことがあったかどうか
 確かめてみよ。
 11 果たしてどこの国が
 神々を取り替えたりするだろうか
 しかも、神ならぬものと。

ところが、わが民はその栄光を
 役に立たないものと取り替えた。

- 12 天よ、このことに驚け。
 大いに、震えおののけ——主の仰せ。
 13 わが民は二つの悪をなした。
 命の水の泉である私を捨て
 自分たちのために水溜めを掘った。
 水を溜めることもできない
 すぐに壊れる水溜めを。

エフェソの信徒への手紙 6章10～20節

10最後に、主にあって、その大いなる力によって
 強くありなさい。11悪魔の策略に対して立ち向か
 うことができるように、神の武具を身に着けなさい。
 12私たちの戦いは、人間〔直訳→肉と血〕に対
 するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配
 者、天にいる悪の諸霊に対するものなのだからで
 す。13それゆえ、悪しき日にあってよく抵抗し、す
 べてを成し遂げて、しっかりと立つことができる
 ように、神の武具を取りなさい。14つまり、立って、
 真理の帯を締め、正義の胸当てを着け、15平和の福
 音を告げる備えを履物としなさい。16これらすべ
 と共に、信仰の盾を手に取りなさい。それによ
 って、悪しき者の放つ燃える矢をすべて消すこと
 ができます。17また、救いの兜をかぶり、霊の剣、
 すなわち神の言葉を取りなさい。18どのような時
 にも、霊によって祈り、願い求め、すべての聖なる
 者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく
 祈り続けなさい。19また、私が口を開くときに言葉
 が与えられ、堂々と福音の秘義〔→神秘〕を知ら
 せることができるように、私のために祈ってくだ
 さい。20私はこの福音のための使者として鎖につ
 ながれていますが、どうか語るべきときに、私が
 堂々と語ることをできるように祈ってください。

マルコによる福音書 3章20～27節

20イエスが家に帰られると、群衆がまた集まっ
 て来て、一同は食事をする暇もないほどであった。
 21身内の人たちはイエスのことを聞いて、取り押
 さえに来た。「気が変になっている」と思った〔別
 訳→人々が言っていた〕からである。22エルサレム
 から下って来た律法学者たちも、「あの男はベル
 ゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪
 霊の頭のカで悪霊を追いつけている」と言ってい
 た。23そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえ
 を用いて語られた。「どうして、サタンがサタン
 を追い出せよう。24国が内輪で争えば、その国は立
 ち行かない。25また、家が内輪で争えば、その家は
 立ち行かない。26もしサタンが内輪めめして争え
 ば、立ち行かず、滅びてしまう。27また、まず強い
 人を縛り上げなければ、誰も、その人の家に押し
 入って、家財道具を奪い取ることはできない。ま
 ず縛ってから、その家を略奪するものだ。

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・3月13日「受難節第2主日」の日課主題は「悪と戦うキリスト」。教会暦として定められた「受難節(四旬節)」の営みの中に、特に「洗礼志願」と結びつけて「悪霊追放の祈り」が置かれてきた伝統がある。これは、いわゆる「悪霊祓い(祓魔、エクソシズム)」の儀式と言うよりは、「洗礼の恵みにあずかる者として悪霊から離れた生活をする決断を促し、教会共同体がこれを共同の祈りによって支える」ことを確かめるものである。伝統的な教会では、この「悪霊追放の祈り」の営みを「受難節」中の主日礼拝の中に組み込んでいる。

・福音書日課は、「マルコによる福音書」から、いわゆる「ベルゼブル論争」の箇所の一部。旧約聖書日課は、「エレミヤ書」から、エレミヤの預言集の最初となる箇所。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、本書簡の最後の勧告の箇所。

旧約日課(エレミヤ2章より)

・「エレミヤ書」は、先主日にも日課として定められており、概要は前週資料「聖書と祈りの会 220302」を参照。日課箇所は、本預言書の前半部(1~24章)にまとめられた「エレミヤの預言集」の一部。1章は「預言者の召命に関する物語」として置かれており、日課箇所が実質的に「預言集」の初めとなっている。

・8節「バアル」は、元来「所有者/主人」を意味する語で、旧約中ではそのような用例も少なくないが、この語がさまざまな土地と結びついた豊穡神を指して「〇〇バアル」という用いられ方をすることから、異教神を指す一般用語としての用法が出てきた。そのような用法での用例は、旧約中、偏りがあり、正典「律法」各書で数例ずつ、正典「前の預言者」(「ヨシュア記」~「列王記」)および「歴代誌」では広範に、正典「後の預言者」(「イザヤ書」~「マラキ書」)では「エゼキエル書」と「ゼファニヤ書」で一例ずつあるほかは「エレミヤ書」および「ホセア書」に集中している。正典「律法と預言者」の編集編纂過程から推認すると、以下のようになる。前7世紀終わりに南王国ヨシヤ王の時代の改革に参画した預言者エレミヤらが、前世紀(前8世紀)の北王国滅亡の時代の預言者ら(南王国のイザヤ、ミカ。北王国のアモス、ホセアなど)を一つの模範として祭司=預言者の伝統継承集団を形成した折に、預言者エレミヤは「ホセアの預言」から「異教神バアル批判」を引き出した。その後、「ホセア」~「エレミヤ」の系譜を継承する祭司・預言者集団がバビロン捕囚時代を越えて正典編纂に携わったとき、「前の預言者」として編纂された「カナン定住時代のイスラエル正史」の中に、ホセア・エレミヤの視点から「異教神バアル」の問題が描き込まれることになった。この「異教神バアル」の淵源は、北王国の「暗黒時代」とみなされたオムリ王朝時代(前876-842年ごろ)にアハブ王の王妃イゼベルによって、フェニキアからもたらされたが、オムリ王朝を打倒したイエフ王朝によって排斥された。

・エレミヤの預言は「行って、エルサレムの人々に呼びかけよ」から始まる。エレミヤは、元来、地方聖所(ベニヤミン領アナト)の祭司の子であったが、ヨシヤ王の改革によって地方聖所が廃されて中央聖所であるエルサレム神殿に集約されるにあたって、拡大されたエルサレム祭司団に召喚されたと考えられる。ヨシヤ王の改革は、当時の覇権国アッシリアが新興勢力バビロニア・メディア連合によって急速に凋落する時代に、バビロニア・メディア連合側と同盟し、アッシリア支配が退却した元北王国領域を南王国領として編入することでもあった(そのための地方聖所=地方権力の排除が行われた)。すでに北王国は前世紀に滅亡し支配層はアッシリアに捕囚されたり離散していたが、その領域に残る者たちおよび移入して混淆した住民に対して、同化のための「大イスラエル主義」を掲げる必要があった。そこで、日課箇所中、エレミヤが「ヤコブの家」あるいは「イスラエルの家」と呼ぶ対象は、単純に旧北王国ということではなく、旧北王国を含む「大イスラエル」としての南北両領域の人々を指すものとして解釈するほうが適当であろう。確かに、旧北王国が滅亡した事実があり、それを踏まえた罪の指摘がなされるが、それは過去の失敗に対する糾弾ではなく、過去の失敗を踏まえてその失敗を繰り返さないための指針としての指摘なのである。

・このように始められたエレミヤの預言は、ヨシヤ王の改革が途中で挫折し、バビロニアの侵攻により南王国自体が滅亡の危機にさらされる時代を迎えると、過去に北王国が失敗したことの繰り返しは南王国で起こっているとの見立てから、体制批判を伴う裁きの預言の側面を強めることになったのだろう。

使徒書日課(エフェソ6章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、使徒パウロの書簡の一つで、アジア州エフェソの教会に宛てられている。「使徒言行録」によると、パウロとアジア州の諸教会との関係は深く、エフェソ教会の長老たちとの特別な関係性も伝えられている(使徒19~20章)。歴史批判的立場の聖書学者の中には、本書簡をパウロ自身ではなく、彼の後継者による作とみなす立場もあるが、偽書とする決定的な根拠があるわけではない。

・日課箇所は、本書簡の末尾に置かれた「最後の勧告」で、信仰者としての生き方を励ますと共に、パウロ自身のために祈ってくれるようにとも記している。

・本書簡は、アジア州の文化的背景を踏まえた、天界のイメージに基づく表現が多くみられる。また、パウロ書簡では珍しく「悪魔(ディアボロス)」が取り上げられている(11節、4:27。他の用例は牧会書簡で6例)。「悪魔」は、天界論に基づく東方宗教思想では「善神」に対抗する「悪神」の陣営に属する存在であり、善悪二元論的な表現を引き出しているが、これをパウロの本来の神学体系からのものと見る必要はない。とは言え、後代の教会神学において、善悪二元論的な思想が混入する原因になったのは確かである。

福音書日課(マルコ 3 章より)

・日課箇所は、「ベルゼブル論争」と称される箇所の前半部だが、文脈上は、ガリラヤ湖畔で教えを続けられる主イエスがある日、山に登られて十二人を「使徒」として任命されたこと(3:13~19)に続く出来事として、主イエスにとっての「家族(身内)」とは誰のことなのかということを示す場面(3:20~34)の中に置かれている。「ベルゼブル論争」とされる出来事自体は 3:22~30 であり、骨格となる部分は共観福音書が共通して伝えている。

・日課箇所の 21 節で伝えられている主イエスの身内が訪ねて来るという状況は、後段 31 節以下に続くものである。この逸話の間に挟み込むようにして、「ベルゼブル論争」の逸話が置かれているが、元来は別個の伝承であった可能性が高い。この二つの逸話が組み合わされたのは、そこに共通の主題が見いだされたからであろう。共通主題の一つは、どちらの逸話でも主イエスに対して「悪霊憑き」のレッテルが貼られることが発端にもなっていることに見られる点にある。宣教活動の一環として「悪霊追放」をされていた主イエスに対して、「悪霊」との関係性を疑うような批判が生じたことは想像しうるし、それに対してどのような弁証がされたかということは、福音書を生み出した弟子たちの教会にとっても重要な関心事であったと考えられる。さらに、これと関連がある別の共通主題として、「家・身内」の問題が見られる。「家・身内」という概念に対して、主イエスは、一つの神学的、共同体的立場を示され、「新しい共同体」の始まりとしてのご自身の宣教活動を確立してみせられている、と言える。

・21 節「身内の人たち」の直訳は「彼に近い者たち」で、必ずしも血縁の近親者とは限らないが、31 節「イエスの母と兄弟たち」との繋がりに基づいて、ここでは血縁の近親者をおもにイメージさせる「身内の人たち」の訳語が用いられている。

・22 節「ベルゼブル」は、「エクロンの王バアル・ゼブブ」(列王記下 1:6)に由来するとされるが、「バアル・ゼブブ」は「蠅の王」の意であり、本来は「バアル・ゼブル(いと高き主)」であったと考えられている。「ベル」や「バアル」は、セム語圏で一般に神の呼称の一部に充てられる語となっている。旧約ヘブライ語で「バアル」は、異教神を指す例と共に、より一般的に「所有者・主人」を指す語としての用例が多数ある。つまり、この語に宗教性のみならず世俗性を見ているのである。

来週の誕生日 (3月13日~19日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-22 番「深き悩みより」(= I 258「貴きみかみよ」詞)は、M・ルターが宗教改革運動の初期にドイツ人庶民のための詩編歌として作詞した一つで、詩編 130 編に基づいて作詞、1524 年出版の讃美歌集に加えられた。いくつかの曲で歌われてきたが、ダハ

シュタインの曲を付したものの。同じ詞に M・ルター自身が古い教会旋法に基づいて作曲したものは 160 番に所収。『讃美歌 21』に採用される際に原詞に基づいて改訳されている。

・21-161 番「見よ、主の家族が」(= 39 番)は、詩編 133 の「見よ、兄弟たちが共に座っている。なんとこの恵み、なんとこの喜び」を歌うもので、ユダヤ教会の典礼歌の形式に倣った讃美。

・21-503 番「ひかりにいます主」(= II 28 番)は、18 世紀ドイツ・ヘルンフート兄弟団の指導者ツィンツェンドルフの原詞(15 節版)を J.ウエスレーが英訳した英語版で広く知られる。曲は、18-19 世紀オーストリアの音楽家プレイエルの原曲を 19 世紀英国の作曲家 W.ガーディナーが編曲したもの。

21-22「深き悩みより」**Aus Tiefer Not Schrei Ich zu Dir**

1. Aus tiefer noth schrei' ich zu dir, / Herr Gott! erhör' mein rufen! / Dein gnädig ohr neig her zu mir, / Und meiner bitt' sie öffne: / Denn so du willst das sehen an, / Was sünd' und unrecht ist gethan, / Wer kann Herr! für dir bleiben?
2. Bei dir gilt nichts denn gnad' und gunst, / Die sünde zu vergeben; / Es ist doch unser thun umsonst, / Auch in dem besten leben: / Für dir niemand sich rühen kann, / Deß muß dich fürchten jedermann, / Und deiner gnaden leben.
3. Darum auf Gott will hoffen ich, / Auf mein verdienst nicht bauen; / Auf ihn mein herz soll lassen sich, / Und seiner güte trauen, / Die mir zusagt sein werthes wort, / Das ist mein trost und treuer hort, / Deß will ich all'zeit harren.
4. Und ob es währt bis in die nacht / Und wieder an den morgen, / Doch soll mein herz an Gottes macht / Ver zweifeln nicht noch sorgen. / So thu' Istrael rechter art, / Der aus dem Geist erzeuget ward, / Und seines Gott's erharre.
5. Ob bei uns ist der sünden viel, / Bei Gott ist vielmehr gnaden, / Sein' hand zu helfen hat kein ziel, / Wie groß auch sei der schaden. / Er ist allein der gute hirt, / Der Istrael erlösen wird / Aus seinen sünden allen.

21-503「ひかりにいます主」**Seelen-Bräutigam****O thou to whose all-searching sight**

1. O Thou, to Whose all-searching sight / The darkness shineth as the light, / Search, prove my heart; it pants for Thee; / O burst these bonds, and set it free.
2. Wash out its stains, refine its dross, / Nail my affections to the Cross; / Hallow each thought; let all within / Be clean as Thou, my Lord, art clean.
3. If in this darksome wild I stray, / Be Thou my Light, be Thou my Way; / No foes, no evil need I fear, / If Thou, my Lord, my God, art near.
4. Saviour, where'er Thy steps I see, / Dauntless, untried, I follow Thee; / O let Thy hand support me still, / And lead me to Thy holy hill.
5. If rough and thorny be the way, / My strength proportion to my day; / Till toil and grief and pain shall cease, / Where all is calm, and joy, and peace. / Amen.